

# 東日本大震災による帰還困難区域の仮設中学校におけるバドミントン部の事例報告

下川 大樹 (201511926、体操コーチング論研究室)

指導教員：長谷川 聖修、本谷 聡

キーワード：指導プログラム、自省調査

## 【目的】

本研究の目的は、東日本大震災による帰還困難区域の仮設中学校におけるバドミントン部活動の指導を通じて、被災地の実態を調査するとともに、様々な課題を持った中学生を対象としたバドミントン指導プログラムを考案し、その指導内容についてアンケート調査することで、被災地の中学生が意欲的に部活動に取り組むための指導内容に関する基礎的な知見を明らかにすることである。

## 【方法】

1. 中学校関係者への被災地の実態に関するインタビュー
2. 中学生向けのバドミントン指導プログラムを立案・指導
3. 対象者へのアンケート調査実施
4. 調査結果に基づく、指導プログラムの改善
5. プログラム内容：「基礎知識」、「技術練習」、「対人練習」と大きく三項目に分けてプログラムを考案した。基礎知識ではバドミンントンの歴史、バトルドアー&シャトルコックについて、用具やコートについて、ウォーミングアップ、戦術について、技術練習ではオーバーヘッドストローク、ヘアピンとロビング、レシーブ練習、対人練習では基礎打ち、半面シングルス、全面シングルスを行った。



## 【結果と考察】

1. スポーツ庁の「全国体力・運動能力、運動習慣等調査結果」を基にしたアンケート結果では、全国平均と比べてあまり意識に差がみられなかった。
2. 体力テストの全国平均を、双葉中学校の平均と比べてみると、数種目において全国平均を上回っているが、それ以外の種目は全国平均を大きく下回る結果となった。少人数の状態、肥満傾向の男子が多いことや、健康面で問題を抱えている生徒もいた

め、集団として評価することは難しいが、体力向上への取り組みが必要であると推察された。

3. 興味度は、全体を通じて全員が「とても楽しかった」と回答した。毎回アンケートを取り、生徒のニーズに答えられたことが要因だと推察された。また、バドミントンに興味を持ってもらうためにシャトルを打つだけでなく、バドミントンというスポーツ文化をできるだけ多様な視点からアプローチしたように心がけたことも、楽しさを引き出したと考える。

4. 難易度は第一回の指導で「難しかった」と回答する生徒の全体比は 25%であったが、二回目以降は、「簡単だった」と「どちらともいえない」と回答する生徒がほとんどであった。これについては、難しくすぎず、また簡単すぎないという点で「どちらともいえない」という回答が、課題設定として適切であったとも考えられる。ただし、技術レベルの個人差が大きいため、適切な課題を設定するのは難しいと思われた。

5. 理解度は、「よく理解できた」と回答した生徒の全体比で、第一回目 75% (6名)、第二回目 75% (6名)、第三回目 86% (6名)、全体の指導 86% (6名)と高い割合を示した。要因としては、理解を深めるために詳細を記したプリントを配布したり、専門的な技術の説明をする際は、実技を中断し、集中するように努めたことが考えられる。さらに、「ものを投げるように」イメージしてラケットを操作するなど、できるだけ分かりやすく具体的に説明したことも生徒の理解度を深めるために役立ったと思われる。

## 【結論】

体力低下問題など被災地の様々な課題を持った中学生を対象に、バドミントン指導のプログラムを考案し、その指導内容についてアンケート調査した結果、どの回も高い興味度と理解度が示された。しかし、課外活動とは言え在校人数が少ないため、全員が単一種目のバドミントンに取り組んでいる状況からすると、意欲的に部活動に取り組むことは難しい状況だと思われる。それ故、スポーツを含めて、様々な分野の専門家が被災地の部活動指導等に関わり、寄り添うことで、意欲的に活動に取り組む生徒を育てることができると感じた。